

「曙一派」の提言

——男女観を中心に——

白井ユカリ

一 はじめに

明治二三年初頭、『女学雑誌』は「読売新聞の女史」
(二・一八)と題して、次のような記事を掲載した。

読売新聞には何々女史の名頻りに現はれ来れり、其名は今年初見の名にして其実名に至りては読売新聞自身すら之を知らず、然れども皆な曙女史一派の女秀才にして女子にてあることは極めて確かなりと聞けり、果して然らば其辞句の少し穏やかならぬもの多きにあらざや、特に初恋論など云ふに至りては西洋の女詩仙がラブを論ずるとは感想大ひなる懸隔あるにあらずや。

(太字引用者、以下同じ)

曙女史、清花女史、紫英女史、大森惟中が、同じ目的の下で文学活動を行なったことについては別に論じたが、二年正月の『読売新聞』(以下『読売』)^{注1}には、曙女史「わか松」(三〇二〇)、清花女史「娘気」(二一七八)、紫英女史「読売新聞の初刷を祝ひて」(七)、三木しげ子(大森惟中)「虎乃巻」(三〇七)が掲載され、文芸面が、ひとつのグループによつて埋め尽くされるといふ不思議な現象がみられた。『女学雑誌』の記事で新たに注目されるのは、「初恋論」の作者もまた、「曙女史一派」だとしている点である。「初恋論」は「桂香女史」の署名で、同月一〇日と一日、同じく文芸面に掲載された。同署名では他に、「北山居士」なる人物との共同執筆という形で、「嫉妬論」等が書かれている。

〈曙女史一派〉とは、同じ目的の下に集う曙とその仲間たちを指すのであろうか。この表現は、管見の限りでは、前掲記事を除いて認められないが、これに信を置くらば、すでに判明しているメンバーの他に、桂香女史、北山居士も含まれることになる。

明治二三年のボアソナード民法発布を視野に入れ、明治二二年六月、基督教徒の女性たちから発せられた一夫一婦運動の波は、全国的な広がりをみせ、さらに廃娼問題をも喚起していた。曙「操くらべ」〔読売〕明二二・一〇・六（八）と、清花「娘気」は、ともに一人の男性と二人の女性という構図を用いた小説で、「一夫一妻制」および「娼問題」への一派のスタンスを示していると考えられる。本論では、この二作品に、桂香、北山の一連の評論を照応させて検証していく。

結論からいえば、「男性による複数女性の所有」の是非をめぐる論議が喧しいなか、一派は、「複数女性による男性の共有」という視点の転換を打ち出し、男女関係における「女性主導」のあり方を提言した。そういった一派の理想の先進性を証明していくとともに、明治二〇年代のごく短い期間、「曙一派」と呼ぶべきグループが存在したことを確認し、現在文学史的に定位されていないそれを、ささやかにでも定位させることができたと願っている。

二、「操くらべ」

(a) 『源氏物語』と『春色梅児誉美』

曙や大森が、庶民によく知られる歌舞伎作品や文学作品に材を取り、その共通認識を前提とした創作によって、とくに一般女性を対象とした通俗教育を試みたことについては、以前述べた^{注2}。

それは「操くらべ」においても同様で、男一人に女二人の構図、二人の女性に玄人女性と男と婚約関係にある若い女性を配す設定、玄人女性への〈米〉^{注3}という命名、最終的に女性二人が相和して共生する枠組み、等からみて、基層に、為永春水『春色梅児誉美』があることは明らかといえる。明治中期、活版印刷の普及は、江戸戯作の翻刻に大いに寄与し、また、坪内逍遙『小説神髓』は、従来評価の低かった春水の人情本を、近代小説の要素に合致しているとして高く評価した。江戸戯作の復活と『神髓』による再評価、この二つを要因として、『梅児誉美』シリーズは、明治二〇年を中心にして続けに翻刻がなされ、庶民に身近な存在となっていた。

同時に作品には、小題ごと^{注4}に源氏香が掲げられ、『源氏物語』所収の和歌が引かれるのであるが、こういった『梅

児誉美』『源氏』引用の含意は、どこにあるのだろうか。

『神髓』では、『源氏』と春水の人情本とは一つの系譜に連なる作品と捉え論じている。春水は、『梅児誉美』シリーズにおける、主人公〈丹次郎〉と女性たちとの恋模様を、『源氏』を基底に、等しく「もののあはれ」によって描き尽くそうとしたのだという（丸山茂『春水人情本の研究』桜楓社、昭五三）。つまり、「一人の男性と複数女性との恋」という様式において、『源氏』『梅児誉美』は、元来同じ系譜に属しており、この時期、『神髓』によって、それがより強調されたといえよう。

したがって、曙は、『源氏』『梅児誉美』を踏襲すること、中古、近世の男女関係を経て、新しい時代の男女関係はどうあるべきか、系譜の延長線上に、その提案をしようとしたと推測される。なかでも、一般女性たちに愛読された、『梅児誉美』をモチーフとすることは、その階層の女性を啓蒙する上で有意と判断したと考えられる。

(b) 作品考察

本稿は『梅児誉美』を視座として比較を行う。あらずじは以下の通りである。〈春 亀井戸村の料亭老松^{注6}では、馴染み客〈道夫〉から、酌婦〈米〉に別れ話が切り出されていた。米は動揺しつつも必死で承諾を伝える。道夫は別れに余韻を残そうとするが、米はそれを戒め、覚悟の程を伝

える。〈夏〉道夫の許婚〈雪子^{注7}〉は涙にくれていた。道夫から結婚延期の申し入れがあったのである。道夫の煮え切らない態度によって、少女は煩悶し、死すら思い詰める。

〈秋〉もの思いに身も瘦せた米のもとを、道夫が再び訪ねて来る。米は心と裏腹な言葉で突き放し、道夫は恥じ入り立ち去っていく。^{注8} 夫婦となった道夫と雪子の家には、使用人として働く米の姿があった。結婚後、雪子は米の存在を知り、体を壊していた米を、身元を隠して雇い入れたのである。道夫は米を家から出そうとやつきになるが、雪子は長男〈道太郎〉の守として家に置くことを主張する。

道夫は立つ瀬がないが、雪子はそれが皆のためといい、米はすでに従者として生きる決意を固めている。^{注9} 三人は夫婦と主従という新たな契りを結び、力を合わせることを誓い合う。

「操くらべ」では、これまでの曙作品とは異なり、女性から男性への愛情が切々と語られる。しかし、だからといって、男女関係において、女性が弱者の立場に置かれているわけではない。道夫は、米との別れに際して、〈あとさきも考へぬ〉〈つ、しみのない〉男だったと自らを評し、〈ゆるして下さい〉と頭を下げる。また結婚後は、完全に雪子の尻に敷かれ、保身に懸命な惨めな姿を曝し、最後は、これまでの米と雪子の〈赤心〉に対して、平身低頭の詫び

と礼を述べるのである。作品は、覚悟のある女とない男、自制心のある女とない男、等の図式を重ね、女性上位の構図を、はつきりと浮かび上がらせている。

道夫によって語られる〈赤心〉¹⁰は、〈操〉と
いい換えることが可能であろうが、では、作品における操とは、いかなる内実を持つのであろうか。

米は道夫との別れに際して、「二度と会わない」という誓いを立て、自らの意志として従者の道を選択した後は、誓いの内容は「復縁しない」に変容する。縁談を受けること¹⁰〈操を破ぶる〉とする米にとっての操とは、「道夫と復縁をしない」いわんや「他の男性とは情をかわさない」と理解される。米は道夫からの愛や庇護を求めず、男性一般に従属しない生き方を選び取ったといえる。一方、米の存在を知った雪子は、嫉妬の超越が前提の「三人同居」を選択する。「三人平等に献身する」ことが、雪子にとっての操であった。雪子もまた、道夫におもねることなく、自身の規範に従って行動した。

作品タイトル「操くらべ」とは、操の優劣を競う意ではなく、操の照合の意だといえる。操という名の志、誇り、名誉を守りぬく覚悟を決めた時、恋のために、病や死の近くにあった女性たちが、一気に弱者から強者に立ち位置を変えていることは重要であろう。

『梅児誉美』では、〈米八〉〈お長〉から〈丹次郎〉への、犠牲的献身、身持ちの堅さを指して操と呼んだ。¹¹その結果、『梅児誉美』における操は、男性の欲望に沿い、三角関係を維持する方向に働いたが、作品での操は、むしろ逆に働いている。作中、道夫は米に復縁を求め拒絶された際、〈若し御身にて非らざりせば、我身はくざりはてなんに、よくぞいけんを為し呉れし〉と礼を述べ、ラストでは、二人の〈赤心〉¹²は操が、道夫の心が〈くさ〉ることを防いだとして、謝意を述べる。

我こそは如何様に心くざりししれ者と云ひけなさるるも是非なきに卿等二人の赤心より人にも知られで過ぎし事礼のぶるべき様もなし過ぎ来し事はわびもせん：

米の操が道夫の不貞を未然に防ぎ、雪子の操が道夫の社会的信用を守ったことに鑑みれば、作品における〈くさ〉るとは、「人道に外れる行為」といい換えられよう。したがって、彼女たちの操は、「道」に向けられているといえる。操によって、道夫は「夫の道」から外れることを免れ、道太郎もまた「長男の道」を教導されることが示唆される。作中の男性は、女性に軌道修正され、教導され、ようやく人の道を全うできる存在という位置付けにある。一方で、作品には社会的な役割分担も示され、精神的立場、

社会的立場を均すと、新たに三人同等という構図が出現する。

『梅児誉美』のラストは、登場する四人の女性が「姉妹の約束」をなすところで大団円を迎えるが、これに対して「操くらべ」は次の一文で結ばれる。

三人はいつか憂き事も、とけて楽しきあげまきの、いとより長き契りをば、むずびこめたるいもとせに、つながらる縁の主従が、心の程や如何ならん、

三人は、かつての恋人と夫婦という関係を、夫婦と主従という関係に結びかえ、〈あげまき〉に象徴される一体化を果たす。これは一体化の型の、「複数女性が一体化して男性に従属する」(『梅児誉美』)から、「男女が一体化する」(『操くらべ』)への変更といえ、操の内実の、「女性の男性への献身」(『梅児誉美』)から、「女性の人道への献身」(『操くらべ』)への変更に相関する。

作品は、操の内実を改めることで、同じ大きさ、同じ形の三輪からなる「総角結び」のごとく、男女も主従も越えて平等を手に入れることができると説く。それが、新しい時代の男女関係の理想だと、曙はしているのである。

三、「娘気」

(a) 『妹背山婦女庭訓』

「娘気」と併載された、三木しげ子(大森惟中)「虎乃巻」冒頭では、座頭の口上よろしく、一派のメンバーが紹介される。

曙さんの松竹梅に、清花嬢の雪月花、紫英女史の四季
によそへし祝辞とは、何れおとらぬ若枝の花(中略)

(そのなかにあつて自分は：引用者) 妹背のお三輪の
御殿場ならお豆腐買う官女の役割……^{注14}

〈妹背のお三輪の御殿場〉は、歌舞伎『妹背山婦女庭訓』四段目切「御殿の場」を指す。『妹背山』四段目は、いわずと知れたお三輪の恋の物語で、幼く無邪気な少女お三輪が初めて恋をし、嫉妬の感情を覚え、嫉妬ゆえに恋する男を深追いし、嫉妬ゆえに殺されてしまうという話である。引用に続く文章で、曙、清花、紫英を文楽の人形、自らを〈黒坊〉＝人形遣いに喩える大森が、ここで〈妹背のお三輪〉を挙げていることは重要といえよう。これまでの経緯^{注15}から鑑みて、大森がメンバーに与えたモチーフを開示しているとみなせる。

「娘気」はそのタイトルからしてお三輪を連想させる。

作品発端で、ヒロインが恋する若者を、あえて〈箕輪〉^{注16}（現在の東京都台東区三ノ輪）の方角からやって来たとしており、三輪の里を舞台とする『妹背山』と重ねる意図がみてとれる。北山・桂香の「嫉妬論」が同時掲載されていることも、裏付けとなる。お三輪は「初恋と嫉妬」を象徴する存在といえた。歌舞伎が生活に密着していた当時にあって、一途な恋の体現者として偶像化されていたお三輪をモチーフとすることは、若い女性層の啓蒙に有意という判断がなされたものと思われる。

(b) 作品考察

梗概は以下の通りである。〈雪の巻〉吹雪の夜、行き倒れになった娘を、通りがかりの若者が自宅へと連れ帰る。意識を取り戻した娘は〈雪〉と名乗り、貧窮した身の上を語る。同情した若者は慈悲を施し、雪はその優しさに心惹かれるが、妻帯者だと誤解して諦める。〈月の巻〉令嬢花は一目惚れの恋に苦悶していた。侍婢として仕える雪が仔細を訊ね、いくつかの情報から、相手は自分を救った〈秋月輝男〉ではないかと伝える。偶然にもそれは、花が拒否していた縁談の相手であった。花は雪を新居に伴うことを希望するが、雪は輝男への未練を恐れて断り、身を引く。〈花の巻〉輝男は新妻の花に、結婚前に雪からもらった手紙を見せる。文面から、花は雪が自分と〈同じ恋の闇路〉

にいたことを知る。月日が流れ、病室には衰弱した花と、看護婦^{注17}となった雪の姿があった。花は雪に輝男の後妻となつてほしいと遺言する。花の両親も輝男も賛意を示し、花、雪、輝男の三人は、葡萄酒で姉妹の契りと夫婦の固めの杯を交わす。直後に花は笑つて息を引き取る。

この作品においても、女性の恋情が切々と語られるものの、その娘気溢れる恋情は、お三輪のように嫉妬に向かうことはない。雪は輝男に心惹かれながらも、〈奥様のあること〉と自制し、輝男と花の婚約が成立すると、輝男の〈御顔を見れば思ひの種〉と暇を願ひ出る。雪は〈一生婦で暮す〉決心で、看護婦として生きる道を選ぶ。「道義に外れぬよう自制する」「操を守つて独身を貫く」といった選択は、筋を通して潔い。一方の花は、死に際して雪に〈恩〉を返すことを切望する。「平等な幸福のために献身する」、それが花の心意気であった。〈娘気〉とは、「娘らしい気立て」「世馴れぬ少女の心」といった意味合いであるが、二人の娘気は、真つすぐに曇りがない。

対する輝男は、新妻に雪の近況を矢継ぎ早に質問し、雪の人柄を誉め称えるなど、関心の強さが隠せない。^{注18}妻と睦み合いながら、妻の前でほかの女性に未練をのぞかせる輝男は、優柔不断な印象である。ところで、輝男はなぜ雪からの手紙を妻に見せたのか。手紙に書かれた〈なまじひに

見ぬこそ好けれ秋の月こひの闇路にまよふこの身は」の歌の意は、訊ねるまでもなく分かりそうなものである。妻の反応から、輝男が雪の恋情を確信すると、ちょうどそのタイムングで、茶亭の女が「へーいお誂へが出来ました」と入って来て、この回幕となる。「お誂へ」には、物語としてのお膳立てが整った、との含意がみてとれよう。

しかしながら、たとえ輝男が雪の所有を希望したとしても、輝男と会わないことを（一旦心に誓った）雪であるから、叶うはずもなく、もしも叶うとすれば、輝男が独身に戻るとの目と見えようが、それは現実となる。花の病死は、まるで身を引くための、緩慢な自殺のようにも思える。結局、輝男の複数女性の同時所有を不可能にしたのは、女性たちの娘気だといひ得よう。輝男は、雪と花によって規範からの逸脱を阻止され、囲い込みをされる存在といえる。^{注19}物語のラストは次の一節で結ばれる。

顔つくくくと打成り姉さん良人といひしを言換へて：
…兄さん、何うぞ、中好うと笑むを此世の別れにて、
盛り短き桜田の浅き縁と、夕告る鐘に散り飛ぶ、入相の花。

三人は、主従と夫婦という関係を、姉妹と新たな夫婦という関係に結びかえる。三人の一体化は、死にゆく花の（右と左の手掌をお雪と輝男が握り持つ）と形容され、横

並びの印象である。この最終章が、「入相の鐘」で始まり、「入相の花」で終わることは興味深い。もしも、「入相」＝「日の入る頃」に、別語としての「入相」＝「一定地域の住民が共同利益すること」の意を掛けているとしたならば、「娘気」は、「共同利益の物語」と読めるのかもしれない。少女の恋における娘気を、お三輪に象徴される「嫉妬」から、「自制」「平等性への献身」に変更しているところに、作品の眼目がある。物語は、娘気の内実を後者とするので、男性による女性の複数所有を防ぎ、ひいては、女性が男性を共同で用益することも可能であると主張する。清花は、お三輪を美化する少女たちに向けて、今後あるべき男女関係を、そう啓蒙しているのである。

四、「操くらべ」と「娘気」

「操くらべ」（略記「操」と「春色梅児誉美」、「娘気」（略記「娘」と『妹背山婦女庭訓』との関わりを主に論じてきたが、「操」にも『妹背山』が、^{注20}「娘」にも『梅児誉美』が踏襲されている。いずれも、『梅児誉美』（男女三人の恋）、『妹背山』（少女の初恋）の世界を借りていることは間違いない。

二作品はきわめてよく似た構造と内容を持つ。構造の一

致は、何といつても、一人の男性に二人の女性を配すという構図であろう。展開はいずれも、①世間の厳しさを知る労働者階級の女性と男性との触れ合い ②男性との婚姻がお膳立てされている年若い女性の煩悶 ③男性を諦めた労働者階級の女性の苦悩 ④三角関係の決着 という順序である。内容の一致を挙げてみる。①女性から男性への情愛がはつきりと示される ②男性は、婚約者や見合い相手がありながらほかの女性に心を動かし、しかしその恋情には永続性がないことが示唆される^{注22} ③男性は、当初周囲が決めた相手への感情は希薄であるものの、夫婦となつてからはそれなりに落ち着いた感情で結ばれる ④恋するあまり死すら思い詰めていた少女は、妻となつたとたんに貫禄を身につけ、一方夫たちは押され気味である^{注24} ⑤男女三人の一体化で閉じられる

二作品には連動もみられる。①「操」で、妻・雪子が〈ア妻さへあらなくば……〉といったのを受けるかのように、「娘」では、妻・花が病死することについては、すでに指摘がある^{注25} ②「操」では、妻となる女性の名が〈雪〉または〈雪子〉であるが、「娘」では、妻となる女性の侍女の名が〈雪〉である。これは、曙「婦女の鑑」(『読売』明二二)のヒロインの名が〈秀子〉、清花「双根竹」(『江戸新聞』明二二)のヒロインの親友の名が〈秀子〉であつ

たのと同じ相関である ③「操」で、道夫と雪子が窓外の景色を眺めつつ、〈月雪花ともてはやす程有りて……〉と語り合うが、「娘」では、この〈月雪花〉が登場人物三人の名前となっている ④「操」の作品末尾が「読点」で終わっているのは、「娘」へ「続く」を意味していると思われる

これらの一致や連動は、「操」と「娘」が、一對の関係にあることの証左といえよう。曙「婦女の鑑」と清花「双根竹」も、一對の作品として、「女性の友情と事業」という同じテーマを扱った^{注26}。では、「操」と「娘」に共通するテーマとは何か。これまで共通項として挙げられているのは、「家父長制」である^{注27}。

たしかに男性たちは、許婚や見合い相手との結婚を受け入れ、家制度に対して従順な存在といえる。しかし女性たちは、お家の存続よりも自らの感情を優先している^{注28}。二作品は、結婚、再婚、雇用までもが、すべて女性の意志によつて決定されるところに特長がある。最終的には、後継ぎ問題を含め、さまざまな偶然によつて家父長制に合致するものの、それは結果であつて、過程において女性たちは、家父長制に縛られてはいない。二作品において、家父長制は、決して否定はされないものの、第一義とはいえない^{注29}。テーマはそれにはないと思われる。

二作品では、女性による男性の平和的共有の方法が、ラストの「男女三人の一体化」という形で示される。「操」での、「総角結び」の三輪の結節点は、女たちの〈操〉といえる。三人同居による共有は、女性性、男性性の封印を必要とし、各自が少しずつ無理をしながら成立する。曙は、女性が「役割分担」に徹することで、男性の共有を実現するという見解を提出した。一方、「娘」での、「雪月花」の如き横並びの一体化は、女たちの〈娘気〉によって果たされる。共存は不可能として、幸福のバトンタッチという方法で共有を実現するのであるが、そのために互いの間の感情を、きょうだいや朋友間の情愛に置換している。清花は、女性が「友愛」を介在させることで、男性の共有を実現すると提案したのである。

もっとも、役割分担であろうと友愛であろうと、女性の連帯で、男性や制度や社会に抗していくことを肯定している点で違はない。いずれも女性に向けて、気紛れで移り気な男性の「専有」を求めるのではなく、女性の連帯によって男性を「共有」し、「共益」を得て、社会を「浄化」することが主張される。これが二作品共通のテーマといえる。

曙、清花は、『梅児誉美』『妹背山』といった、一般女性から熱狂的に迎えられていた物語の枠組みを利用して、そ

れらへのアンチテーゼを提出した。『梅児誉美』のように、「二人の男性による二人の女性の所有」とみるのではなく、「二人の女性による一人の男性の共有」とみる視点の転換を打ち出し、『妹背山』のように、嫉妬を、逃れ難い女性の性とするのではなく、嫉妬を超越した「女性主導」が可能であることを示してみせた。

同時代でみると、尾崎紅葉『三人妻』（明二五）は、まさに、男性による複数女性所有の物語といえる。同時期、同じ『読売』文芸面に掲載された、花圃女史「教衣草をだまき物語」（明二三・四・一四〜二二）も、男性一人と女性二人の三角関係を描いたもので、民法改正を前にした『読売』が、女性作家に同一に求めていたものが理解される。内容は、妻の元から去った夫と妾が、数年後落ちぶれきった様子で妻の前に現れ、許されるというもので、曙、清花作品同様、教訓性が色濃い。ただし、二人の女性は「連帯」からは程遠く、妾には脱疽で両手を失うという罰が与えられる。花圃の「婦一夫制や廃娼問題への見解は、曙、清花のものとは異なっていたといえる。当時の小説の一般が、紅葉や花圃の方にあり、曙、清花の作品が、きわめて特殊であったことはいうまでもない。

ここまで、曙、清花の小説における男女観をみてきたが、北山、桂香の評論では、どういった主張がなされているの

であろうか。「娘」最終回と同紙面に、「嫉妬論」が掲載される。

五、北山居士と桂香女史

北山居士と桂香女史による「嫉妬論」は、文芸面（寄書）の扱いで、一月八日に総論が、翌九日に各論が掲載される。

総論では、愛情の競争すなわち（嫉妬）は、男女を問わず友情を壊してしまい、文明は嫉妬を弱めるものではなく、近代人も嫉妬に翻弄されていると説く。各論は、〈第一項 愛人の嫉妬〉〈第二項 嫉妬の種類〉〈第三項 美麗と嫉妬の關係〉に分かれ、一般に女性は恋着しやすいというが、実際には男性のほうがしやすい、ということが繰り返し述べられる。具体的には、①男性は、妻や情婦のみならず、未だそのどちらでもない相手に対してまでも、とかく嫉妬する ②男性は、相手の過去、現在、未来に対してことごとく嫉妬する ③男性は、美人をみかけると、その美人の男女關係にまで想像が及び、想像による嫉妬までするという内容である。一方、女性は、男性の現在から将来に向かつての〈専有権〉のみを望むとされる。例証を挙げる際にも、「女性に愛想を尽かされた男性」「男性に愛想を尽か

した女性」といった表現がなされ、女性尊重ということにおいて徹底しているといえる。同時に、「教育の十分な男性」「教育の不十分な女性」といった対比がなされ、教育環境における女性の劣勢を認めている。

評論の真意は、愛情の競争によって友情を壊し、男性に対して専有権を望む女性に向けて、「女性はもつと余裕ある態度で男性に望んでしかるべき」と主張することにある。そのため、男性の嫉妬深さや滑稽さを強調して、女性の嫉妬を無意味化していると思われ、これは、「操くらべ」「娘気」と共通する。

恋愛、結婚についての北山、桂香の評論は、この「嫉妬論」（北山・桂香）を皮切りに、以下、一〇日「専有論」（北山）、一〇、一一日「初恋論」（桂香）、一一日「遠慮的心情の不利」（北山・桂香）、一二、一三日「致恋的挙動と望讚的挙動」（北山・桂香）、一五日「美貌論」（北山・桂香）と続く。

「専有論」と「初恋論」は対になっており、男性、女性それぞれの立場から、「愛情は永久に継続しない」ことを説く。北山は、専有の欲こそ嫉妬の元であり、愛情にはつきものであるが、愛情は一時のものであり、よって専有は不可能であると述べる。かたや桂香は、少年が少女に抱く感情のほとんどは真正な愛情とはいえず、だとすれば、

初恋が再度の恋よりも善良とはいえないと主張する。目的は、初恋に盲目的になりやすい少女たちを啓蒙することにあったと思われ、やはり、移り気な男性の専有を望まず、共有することを提案した、「操くらべ」や「娘氣」を裏付ける役目を果たしている。

「遠慮的心情の不利益」「致恋的挙動と望讚的挙動」は、恋愛指南の内容を持つ。筆者は、〈遠慮的心情〉^{注31}は時代遅れで弊害があるとし、また、〈望讚的挙動〉〈過嚴的挙動〉といった、称賛や尊重を得る目的で心と裏腹な言動を取ることを、男性への媚^{注32}とみなして、厳しく非難する。そして、肯定も否定もしない曖昧さによって男性の愛情を強めさせる〈致恋的挙動〉を奨励し、それによって実現される女性主導の恋愛こそが、良人を得ることにつながるのだと説明する。「もしも、致恋的挙動の後で排斥し、その男性が失意のあまり自殺したとしても、それは仕方がない。薔薇の刺で怪我をしたからといって、薔薇を責めるものはいないであろう」といった内容は過激であり、初恋に死ぬお三輪への、強烈な反定立となっている。

最終回の「美貌論」では、〈地位財産〉ではなく、〈愛情〉に依拠する婚姻を勧め、〈美麗〉による選択を否定しない。北山には、明治二年の『読売』〈社説〉欄に、「流行論」(七・一一〜八・一一)と題した、全一〇回の連載

があり、ここでは、女性は〈教育〉と〈衛生〉とによって、健康美、知性美、表情美を獲得するべき、と論じた。「美貌論」での美貌も、そういった要素を持つ〈真正の美〉を指しているものと考えられる。とくに注目されるのは、女性が美麗を得て、さらに賢明な伴侶選びができれば、〈不潔不健康〉である男性を、〈清潔健康〉に導き、〈社会に利益を与へる〉ことができる^{注32}と述べている点である。その思想は、まさしく「操くらべ」「娘氣」のテーマと通底する。

一連の評論を通じて語られるのは、女性が適当な良人を得て幸福な人生を送るための、きわめて具体的な実践方法である。総括すると、男性選びの失敗の原因は、恋に不慣れなため冷静さを欠くこと、剛勇をよしとして男性を選ぶ傾向にあったとして、①女性は初恋に盲目的にならない

②女性は男性に対して鷹揚に構え、それによって男性の愛情を強め、愛情競争の範囲を広げる ③女性は美貌を獲得して、智力ある男性を選ぶ 等の改善策が説かれている。

こういった恋愛、結婚観の背景には、「早婚問題」があると思われる。明治前中期、日本の早婚に付随した離婚率の高さ(欧米の五倍〜二〇倍程度といわれた)^{注33}は、諸外国からも注目を集める程であったという。早婚は文化程度の低さとみなされ、対外的にも改善の必要があった。^{注34}そのため「早婚の戒め」は、多くの女性論で説かれ、^{注35}〈当時の結

婚論のかなめは「晩婚のすすめ」^{注36}といつても過言でなかつたが、そのなかにあつても、北山、桂香^{注37}の説く、「愛情はせいぜい二、三年で冷めるのだから、女性が初恋に盲目的になる必要はない」「少年が少女に抱く感情の大方は狂暴な愛情」といった内容は、非常に斬新かつ現実的なものといえた。

この時期の曙一派の著作には、早婚問題に加えて、即時的な、一夫一婦制と廃娼問題が関わっていると考えられる。彼女らの主張の、時代のなかでの位置付けを、次章で考察してみたい。

六、民法公布と「曙一派」の位置

明治十九年、クリスチャンの女性たちによつて発足した婦人矯風会が、一夫一婦制と廃娼を中心とした女性運動を行なつたことは、よく知られている。二二年六月、元老院に一夫一婦の建白書を提出し、矯風会は一躍その存在を世に知らしめた。

条約改正のための近代法の整備が急がれ、一五年から施行された「刑法」で妾の存在は否定されたものの、旧慣はそのまゝ継続していた。二三年の民法公布を前にして、二二年頃からさまざまな民法論議が巻き起こつたが、そう

いった風潮のなか、矯風会は、姦通罪についての刑法改正案と、民法条案を提出し、一夫一婦制の徹底化を国に要求したのである。^{注38}それをきっかけとして、(神戸に、大坂に、西京に、札幌に、函館に、高知に、千葉に、横浜に)、「一夫一婦」『女学雑誌』明二二・七・二〇)賛同者の声が沸き上がり、別行動として、岡山の清水豊子、京都の景山英子らも建白書を提出するなど、全国規模の運動へと拡大していった。この波はややあつて沈静化したものの、続いて廃娼問題に火が付き、廃娼、存娼、各々の立場から激しい議論がなされた。

「探くらべ」「娘気」の掲載は、まさにこの一夫一婦制と廃娼に関する議論のさなかであつた。それらの議論は、「男女交際論」も呼び起こし、この時期、新聞はもとより、『女学雑誌』『貴女之友』といった女性誌でも、盛んに関連記事が掲載された。

巖本善治は、婦人矯風会の発会に尽力し、会の理解者、協力者という立場にあり、当然『女学雑誌』は矯風会と軌を一にしていた。『女学雑誌』は、『読売』が、娼婦や関連業の失職、密売淫の増加などを理由に、「娼婦の廃絶は直接より間接の方が好ましい」としたことを厳しく批判し(「幾多の非廃娼論」明二三・三・一)、かたや『読売』は、矯風会や『女学雑誌』の主張する廃娼論を、「外観的道德

に過ぎない」「宗教家は職務上そう唱えざるを得ない」
〔社説〕明二二・一二・四、五〕と否定した。

興味深いのは、同じ女性誌であつても、『貴女之友』は、むしろ『読売』と近い立場を取っていることである。

古来よりの習慣中々一篇の法律位にては迎も御存じの通りの横着漢に娼妓はならぬ芸妓はならぬ妾はならぬと深閨奥床しき所まで干渉した所が格別捗々敷利益もなかるべしと存すそれよりは寧ろ社会の濁りたるこの弊風を矯正せらん事に力を尽されては如何と聊か折角の御熱心の無効に属するを気の毒に存じかくは一言忠告し参らするなり夫共一夫一婦と表向丈け法律の名文か立派に立ちさへすれば西洋諸国の如き姦淫騒きか起つても差支なしと云ふの思召なり……〔一夫一婦の建白〕明二二・七・二五)

〔法律の名文〕よりも〔弊風を矯正〕する方が先決とする、引用文の筆者は不明であるが、この時期の『貴女之友』は、大森惟中が編集の実権を任されてお^{注39}り、これは同時に大森の主張でもあつたとみなせる。

娼娼論に限らず、『女学雑誌』と『貴女之友』とは、しばしば異なるスタンスをみせた。明治二二年前後に限つてみても、『女学雑誌』は、「東京高女醜聞事件」の中心人物、矢田部良吉や能勢栄を擁護しているのに対して〔男女間

の清徳〕明二二・六・二九)、『貴女之友』は二人を厳しく非難し〔「国のもとゐる」の中正とは何ぞ〕明二二・四・二三／〔濁世〕六・一四)、東京高女を〔全廃する方然るべし〕〔高等女学校〕明二二・七・一五)とまで断じている。また、国風をよしとする『貴女之友』は、〔純然たる西洋主義の学校〕の生徒の淫行を伝え、その学校で〔女子を教育せらるるの君子〕〔女学生の醜聞〕明二三・三・二五)に釘をさす。そこには、『貴女之友』が、『女学雑誌』並びに巖本に対して、あえて対立姿勢を打ち出している様子が見てとれる。

こういった『女学雑誌』vs『読売』『貴女之友』の図式は、巖本、矯風会vs曙一派の図式に通じると考えられる。キリスト者である巖本は、男女関係についての評論で、肉交を〔犬の如く豚の如きの行〕、また芸娼妓を〔禽獸〕と表現した〔男女交際論〕明二二・六・一六)。この芸娼妓を禽獸とみなす視線と同じ種類の蔑視を、矯風会に感知したのは、伊藤野枝であつたが〔青鞨〕大四・一二)、巖本、矯風会ともに、他に生きる術のなかつた最下層の女性たちへの共感希薄といえた。その巖本、矯風会は、一夫一婦制や娼娼を、「法改正」の問題として捉え、これに対して曙一派は、それらの解決を「女子教育」にみいだそうと^{注40}したといえる。

巖本と曙一派とに限って比較をすれば、巖本は、青年男女を〈下等〉〈中等〉〈上等〉に分け、下等女子の特徴を、〈小説を好み〉〈絵入新聞を好み〉〈其続き物を愛読す〉〔「男女青年論」明二三・五・一〇〕と規定したので対して、曙、清花、大森は、庶民女性が好むという理由で、その〈絵入新聞〉や小新聞に、精力的に〈続き物〉を著した。

『女学雑誌』が〈愛は永遠〉〔愛は変る事なし〕明二三・五・三〕と説くと、前述のように、北山、桂香は、驚くほど現実的な男女観を開陳した。双方とも、女性の地位向上を目的としながらも、曙一派は、一般女性を通俗教育で啓蒙するという方法で、〈弊風を矯正〉する立場を貫いたといえよう。

曙一派の方向性は、国粹主義の立場に立ち、大筋のところでは、国家の要請に沿っていたと考えられる。曙や清花の小説は、真意はともかくとして、表面的には、家父長制に合致し、女徳啓蒙の役目を果たしている、という見方もできよう。大森や北山の著作では、女尊の表現が用いられ、女子教育や婦人衛生の必要性が訴えられるものの、一夫一婦制や廃娼問題に関する法改正への賛意は示されない。こういういった方から、一派が、国家的なものを人々に受け入れさせる、「先触れ」としての役目を担っていたことは否定できない。それゆえに、『読売』を始めとする有力メ

ディアに発言力を持ち得たと想像されるが、国家的なもの啓蒙と、女性の権利拡張、その二面を同時遂行した^{注41}ことが、一派の独自性であり、歴史性とみなせる。

七、おわりに

巖本は、前出の「幾多の非廢娼論」で、『読売』に対して以下の苦言を呈している。

小説に娼妓を主人公と致し、又は花柳の事を風流気物せらるゝ杯のことなきが肝腎に候、かゝることありては、其社説に於て切角廢娼を速かにしたしと懇望せらるゝとも、恰かも一方に火を燃やし乍ら跡より水を灑ぐ如く遂に其の効あるまじく……

社説で廢娼を唱える一方で、娼妓や花柳世界を扱った小説を掲載するのはおかしいといういい分である。事実、『読売』掲載の曙作品には、芸娼妓が登場する。作中の彼女たちは、蔑視や同情の対象ではなく、義理や人情や操を貫き、大活躍をする存在である。曙は、女権思想を持ちながらも、「女権」と「廢娼」とを性急に結びつけていなかったといえる。

曙、清花、北山、桂香は、女性を、法律で保護すべき弱く無力な存在とはせず、世の中を浄化し得る存在と位置付

けた。彼女たちは、一夫多妻や不貞といった男女関係の抑制を、法律ではなく、「女性の自律性」に求めたのである。^{注42}

それは理想に過ぎ、きれいごとで、苦界に身を沈めた女性の現実を知らないという誇りはあろう。しかし、曙自身妾腹の子であり、曙の弟はそのことで揶揄された少年時代を辛く回想している。^{注43}浅草で飲食店を営む曙にとつて、玄人女性は今身近な存在で、だからこそ、矯風会の貴婦人たちが蔑視する芸娼妓は、曙作品のなかでは、華族の令嬢や武家の娘と横並びの存在なのである。清花作品には、芸娼妓は登場しないものの、婢女や侍婢たちは職業婦人として尊重され、ヒロインと連帯を組む。北山居士の一連の著作における、男女観の斬新さについてはすでに言及したが、その表現には、徹底した女尊主義がみられ、フェミニニストの先駆けといえる。

こういった曙一派の特徴とは、「理想の先進性」にある。女性の幸福を、法律の保護に求めるのではなく、女性の自覚や自律性に求めることは、高い理想といえ、それゆえに、先駆的な女権の集団と思うのである。

注1 拙稿「木村曙と独幹散史」〔日本近代文学〕平成一八年

五月。拙稿「東京高等女学校の同窓生にみるシスターフッド」〔日本近代文学〕平成二〇年五月。

2 拙稿「木村曙と独幹散史」〔日本近代文学〕平成一八年五月。

3 『春色梅児誉美』は、色男（丹次郎）、芸者（米八）、生娘（お長）の三角関係を描いた話である。

4 春「紅梅」夏「藤袴」秋「野分」冬「竹河」。和歌の内容からすると、本来、夏「蜜」、冬「総角」であるべきところであらう。

5 春（心ありて風にはほす梅のそのまづ鶯の間はずやあるべき）夏（こゑはせて身をのみ焦す蜜こそいふよりもさる思ひなるらん）秋（風さわぎむら雲まよふ夕にもわする、まなくわすられぬ君）冬（あげまきにながき契をむすびこめおなじところによりも合はさん）。

6 『江戸名所図会』（天保七年）「亀戸 宰府天満宮」によると、裏門近くに老松宮という宮があり、裏門を出てすぐのところは茶屋が並ぶ。この一帯にあるという設定であらう。近くに梅園もあり、梅の香が風に運ばれるという描写にも合致する。

7 雪子の人物造形には、『梅児誉美』の（お長）とともに、田舎で生い立ちながら美しく聡明な『源氏物語』の（玉鬘）もイメージされていると思われる。

8 再開場面は一見夢として描かれるが、『梅児誉美』でも、事実をぼかしながら読者に伝える手法として夢を用いており、道夫の再訪は夢ではなく、現実と捉えてよからう。

なお和歌と対応させると、道夫の再訪は〈まよふ〉〈むら雲〉に喩えられている。

9 理由は、雪子への〈恩〉と、道太郎への〈愛〉のためとされる。

10 一般的には、「固ク志ヲ守リテ変ヘヌコト」(『言海』明治二二年)を意味した。

11 お長が、ライバル米八が丹次郎の内室となる話を聞いた後にも、身を売って丹次郎の借金返済に当てようとした献身や、米八が、恩ある藤兵衛にいい寄られてもそれかわし、丹次郎に尽くし続けた身持ちの堅さなどをもって、操と呼んでいる。

12 道夫は、自分の行状が世間に知れなかったことを安堵しており、彼にとって、対面や面子が重要であることが仄めかされる。

13 精神的には、女性二人は〈赤心〉のもとに对等、道夫はその二人に負い目のある〈しれ者〉という立場である。同時に、〈大事〉を取る道夫、その〈保佐〉をする雪子、雪子の〈かたうで〉米、という社会的立場も示される。また、米は、忠実で〈よみかき〉もでき〈女子の道〉に通じ〈通常の教〉を受けていることを理由に、道太郎の養育係に適任とされる。これらは「賢母」の要件を満たしており、雪子Ⅱ「良妻」、米Ⅱ「賢母」という役割分担が看取されるが、「女」としての性は閉じられた印象

である。「梅児誉美」では、お長Ⅱ「正妻」、米八Ⅱ「側室」という役割が与えられ、女性性は保持されている。

14 自分は半道敵Ⅱ脇役だと謙遜していつているのである。

なお〈妹背山〉とともに挙げられる〈舌出三番〉は、歌舞伎「種蒔三番叟」を指す。大森の著作「夜席演芸」(『貴女之友』明治二二年)にも、〈種蒔三番叟〉の演目が見られ、ここでは、通俗教育は〈令嬢衆の学びの窓〉〈あらし田のさかえを願ふ種蒔〉と説明される。大森並びに一派には、「女学」における種蒔きをしているという自覚が強くあったものと思われる。

15 例えば、曙「曙染梅新型」(『貴女之友』明治二二年)は、歌舞伎「鞘当」を踏襲するが、これは大森から与えられたモチーフで、口上でそれが明かされる。

16 輝男の新吉原通いの暗示ともなっているか。〈箕輪〉から歩いて来た輝男に、雪は〈死體〉として認知され、輝男の介護によって息を吹き返す。これは、「妹背山」で死んだお三輪のよみがえりとも読めよう。

17 〈赤十字社の病院へ看護婦の募集に入り〉、今に至るとされる。明治二〇年に博愛社から改称した日本赤十字社が、看護婦養成を始めたのは二三年四月のことであり、この作品は未来記ともなっている。日赤は〈戦地傷病兵救護を目的に創設された組織〉であるが、〈国策と表裏一体で進行〉し、日赤の看護婦になるということは、すなわ

ち国家的奉仕といえた（『従軍看護婦と日本赤十字社』
文理閣、平成二〇年）。「双根竹」の主人公は女医であり、
清花は衛生分野に関心があったと思われる。

18 この時、輝男は夫婦の縁結びとなった雪を、二人の恩人
でなく、〈御前〉¹¹花の恩人と表現している。

19 作品には、天上の月が、地上の雪や花を照らす描写がみ
られる。この構図と精神的立場とを均すと、「雪月花」
の言葉通り、三人は同等となる。

20 『妹背山』四段目「道行」は、恋しい相手の着物の裾に
苧環を縫い付け、その跡を追うという趣向で知られるが、
「操くらべ」で、恋に苦しむ雪子の乱れた感情を〈をだ
まき〉に喩え、死をも覚悟の少女の恋と伝えることは、
当時の読者にたやすく妹背のお三輪を連想させたはずで
ある。そして、その〈をだまき〉がきれいにほぐされ、
〈あげまき〉に形を変えろという結構であろうが、この
〈あげまき〉は「三輪」からなる。

21 『梅児誉美』には、少女の恋心の形容として〈娘気〉の
語が散見し、『梅児誉美』は〈娘気〉の物語という一面
があった。

22 米と道夫の関係は梅園と鶯、雪と輝男の関係は竹と月に
喩えられる。鶯は一定の場所に留まらず、月はたやすく
陰る存在といえる。

23 「操くらべ」の雪子は〈おほこげ〉、「娘気」の花は〈お

ほこ気〉と形容される。「おほこ」は、『梅児誉美』のお
長、『妹背山』のお三輪の形容としても用いられる。

24 道夫は滑稽な程情けない夫、輝男は受け身で存在感が乏
しい夫として描かれる。

25 平田由美『女性表現の明治史』（岩波書店、平成一二年）。
26 拙稿「東京高等女学校の同窓生にみるシスターフッド」
（『日本近代文学』平成二〇年五月）。

27 25と同じ。

28 「操くらべ」の雪子は、婚約者の気持ちがないの
であれば、破談にしたいと考えた。従者となった米は、
一生独身を貫く覚悟である。「娘気」の花は、好きでも
ない相手と家のために見合い結婚するのは、〈無理な
事〉とした。雪は看護婦として身を立て、独身を通すこ
とを選択する。これらはみな、家父長制の縛りの外にあ
るといえよう。

29 生涯独身を心に決める「娘気」の雪に対して、花の父親
が「家名存続」を論ずる内容は、家父長制に立脚している。
しかしこれは、世間の価値観の代弁と捉えるべきであろ
う。曙「婦女の鑑」でも、父が娘に女徳を訓戒する場面
がみられるものの、作品の眼目は、まぎれもなく女権の
主張にあった。彼女らの作品において、世間的な価値観
と作品テーマとは二重構造になっていると考えられる。

ふたつの折衷例もある。曙、清花の作品では、婚入り婚

- 30 が描かれ、「娘気」のように嫁入り婚であったとしても、老親介護に關して女系の扶養が示唆される。男系の拡大家族で嫁が舅姑の扶養をする形態が一般だとすれば、女系の扶養は、女権と家父長制との折衷といえよう。
- 31 妻の名が〈操〉、妾の名が〈をだまき〉である。
- 32 ただし〈小説的愛情〉には〈必要なる元素〉という認識を示し、小説世界と現実世界とを、一部区別している。
- 33 北山は、「流行論」で、健康を損ねても男性からの望讃を得ようとする衣裳＝コルセットやハイヒールを否定し、二三年の一連の評論でもやはり、男性におもねる屈折した感情表現を否定している。これらは、女尊思想の下、女性の身体、感情の解放を肯定し、促しているといえる。
- 34 湯沢雅彦『明治の結婚 明治の離婚』（角川学芸出版、平成一七年）。
- 35 河田鱗也『日本女子進化論』（自家版、明治二二年）。
- 36 横山雅男『婚姻論』（明治二〇年）、河田鱗也『日本女子進化論』（明治二二年）等、同時期の女性論、ほぼ全てにおいて「早婚の弊害」が説かれている。
- 37 33に同じ。
- 38 北山、桂香とは、どういった人物なのであろうか。北山と桂香の文体に違いは見せず、一人二役とみなせるが、詳細は不明である。その著作から推測されるのは、女子教育に造詣が深く、衛生問題に關心があり、外国事情に通じ、国粹主義思想の持ち主、といった著者像である。
- 39 『読売』記者は、「流行論」連載の際、北山を〈社友〉と紹介している。一カ月もの長き間、新聞の顔ともいえる〈社説〉欄に掲載を続けた事実を考えると、曙一派の背後には、それなりの力が働いていたことが想像される。
- 40 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』（ドメス出版、昭和六一年）参照。
- 41 2に同じ。
- 42 二面のバランスにおいて、曙、清花と、大森との間に差異がみられることについては別に述べた（2による）。
- 43 一派の内部には、さらに女性だけの結社が存在したと考えられる（26による）。
- 44 中村正直訳『西国立志編』第一編〈法度（おきて）、たとい美を尽くし善を尽くすといえども、人民のために真実の助けとは成らざることなり。（中略）人民各箇に身を修め、家を治め、また己私に克たんと欲する志發生するにあらざれば、改化することあたわざるなり〉（講談社、平成三年）といった思想にも通じる。
- 45 木村莊平「木村曙女史のこと」（『輝く』昭和九年四月一七日）。

付記

原文の引用に際しては、原則として旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜取捨し、また筆者の判断で傍点を振った。

(しらい ゆかり・実践女子大学大学院平成二一年度聴講生)